

インドネシア人帰還移民の再統合における労働経験の意味 －移住先での労働者層別分析

Meaning of work experience in reintegration of Indonesian migrant workers –Analysis
by Stratification of Workers

中谷 潤子（NAKATANI Junko）

本研究は、インドネシア人移住労働者のなかでも、非熟練労働者、技能実習生、看護師・介護士を含むケア労働者という異なる労働層の人々を比較考察することで、移動の実相と帰還後の再統合の在り方を明らかにすることを目的としたものである。これまでの研究からは、労働者の移住前の学歴や体験が移住後のライフステージ構築に影響するということが明らかになった。そこで、移住労働体験を帰還後にどう活かすかについて異なる移住労働者層をターゲットに分析していくことが必要であると考え、それによって現在インドネシア政府が推し進める再統合政策や自立支援政策の課題も抽出しようとした。特に本研究では、アジア諸国での家事労働に代表される非熟練労働、日本での技能実習、看護・介護等のケア労働を経て帰還した元移住労働者の自立に向けてのプロセスや地元での新たな基盤形成に必要な要素を見出そうとした。

しかしながら、2020 年からのコロナ禍により、2021 年度もフィールドであるインドネシア東ジャワ州での現地調査がかなわなかった。海外調査を主とした研究は、軒並みオンラインによるインタビュー調査などへの切り替えが試みられている。しかしながら、東ジャワ州の地元で農業を営む、いわゆる非熟練労働者として海外で働いた経験のある調査対象者たちは日ごろスマートフォンしか使用していないこと、かつインターネット環境が十分とは言えないことから、オンラインインタビューは難しかった。そこで、現地調査のたびにコーディネーターを務めてくれている現地 NPO のスタッフとの定期的なオンラインミーティングで、情報収集に努めた。しかしながらこのスタッフもコロナに罹患してしまったことで、それも途切れがちになってしまった。

唯一、研究の火を絶やさずにいたと言えるのは、科研メンバーとの定期的なオンラインによる読書会である。じっくりと英語文献に取り組むことなど難しいことであったが、この機会にしっかりと読み、議論を重ねるといった貴重な時間がとれた。そして、海外研究者によるインドネシア移住労働者についての研究を知ることもできた。

継続調査を行っているインドネシア人看護師については、日本在住者、インドネシア在住者とも ZOOM によるインタビューを行っている。日本在住看護師のインタビューデータの結果をもとに、2021 年 8 月に全面オンラインで開催された ICAS (The 12th International Convention of Asia Scholars - Crafting a Global Future) で発表した。その際、同じパネルの参加メンバーと貴重な意見交換をし、その後もメール等で情報共有、交流が続いている。また、それ以外の在日インドネシア人 5 人に新たにインタ

ビューをし、これまでの研究とあわせて分析をし、2021年12月に立命館アジア太平洋大学で行われた”Asia Pacific Conference 2021”で3人でパネルを組んで発表した。

2022年度中には、是非現地調査に行きたいものだと考えている。